

論 説



マクロ視点での品質工学

—マクロ視点が技術者にもたらしたもの—

Quality Engineering in the Macro Perspective
 —What the Macro Perspective Brought to Engineers—

田村 希志臣*

Kisbio Tamura

1. はじめに

品質工学研究発表大会に「マクロ視点での品質工学」セッション（以下、マクロ視点セッションと略す）が初めて登場したのは、2012年の第20回大会である。それ以降、2016年の第24回大会まで5年にわたって継続して同セッションが設けられた。品質工学会は2016年9月に一般社団法人となり、あらたな活動ステージに移行している。それとともに2017年の第25回大会から大会テーマやセッションタイトルに「マクロ視点」の表現はなくなり、「マクロ視点」の議論を卒業したことは象徴的である。

筆者は、2014年の第22回大会から2016年の第24回大会まで3回にわたってマクロ視点セッションの司会を担当し、タッグを組んだもう一人の司会者とともに「マクロ視点での品質工学」について大ホール壇上から司会論説を行う機会を得た。本稿ではその論説を振り返り、5年間にわたって品質工学会の求心力となった「マクロ視点」の議論を通して、われわれはどのような気付きを得たのか、そして今後、われわれはどのような役割を果たすべきなのか、筆者の考えるところをまとめてみたい。

2. マクロ視点セッションの開始

2012年の第20回大会では、大会テーマにこそ「マクロ視点」という表現は含まれていないが、大会実行委員長であった谷本による開催挨拶¹⁾に「マクロ視点」との表現が登場している。挨拶の中

で谷本は、製品の複雑化、システムの巨大化に対応するには、技術、管理、製造、企業戦略を多面的、立体的に組み合わせて最適解を求めることが必要となること、そして、それを最も得意にしているのがマクロ視点を備える品質工学だと主張した。なお、大会初日に矢野宏は「マクロ的視点での品質工学」と題した特別講演²⁾を行っているが、これはマクロ視点をもって品質工学会の20年を振り返る内容である。本稿の主題とする「マクロ視点での品質工学」とは別のものであるため、これは対象にしない。

第20回大会の大きな特徴は、2日目午後に「マクロ視点での品質工学」と銘打ったセッションが設けられたことである。セッション司会は、研究発表大会実行委員長であった谷本勲（アルプス電気、現品質工学会会長）と高木俊雄（コニカミノルタ）のタッグであった。両者は、2013年の第21回大会でもマクロ視点セッションの司会を担当した。大会実行委員長でありながら大ホールのセッション司会を2年続けて担当したケースは前例がないと思う。谷本には、「マクロ視点での品質工学」を通してわれわれに伝え、共有したい強い思いがあったことがわかる。

その最大のきっかけは、やはり東日本大震災³⁾であった。宮城県松島に居を構える谷本は2011年3月に発生した東日本大震災を直接に経験し、沿岸地域の被害を目の当たりにした。その後1年を経ても、被災地域の復興はほとんど進んでいなかったという。縦割り行政の弊害で国、県、市町村は混乱が続き、残念ながら全体感のある対応が取れていなかったようだ。

* コニカミノルタ(株)、正会員